

# 文芸

## 俳句

あじさいの彩深めてる今朝の雨

池田 逸子

ゴム長の踏み込んでる田草取り

伊藤 敬子

慈しみ育てしメロンお興入れ

今関満喜子

靴を脱ぎ砂の上なり夏に入る

魚地 照子

帰したくなくて又注ぐ新茶かな

江森 悦子

緑陰に語る友ありセニアカー

川島 孝夫

プランターに水遣る妻や夕焼ける

川島 通則

十二橋無人の店の花菖蒲

向後 寛

白鷺やぬき足さし足青田踏む

小松 藤男

棹さしてあやめ分け行く緋笠

佐瀬 輝夫

湧き水に実梅放てば青く舞ふ

椎名万里子

あやめ咲き幸福乗せて舟は行く

鈴木とし子

睡蓮やパステルカラー水鏡

鈴木 利子

あやめ舟竿のさばきも母ゆずり

玉虫 栗扇

しつとりと打水のあり門構え

土屋美枝子

新じやがを握る日は母のカレーかな

土屋 義昭

骨密度褒められてゐて半夏生

戸村 静華

在りし日の無性に恋し夏まつり

内藤 くに

初水着びよんぴよん跳ねる孫娘

西崎さち子

十葉の花の白さや雨の中

早川 勇

睡蓮の座のとびとびといふ気品

藤田 雅夫

## 短歌

麻綿原の傾りに咲ける紫陽花の

碧ひといろに五月雨の降る

鈴木まさ子

心にも糧を持てよと息子は言ひて

田崎 尚美

葱畑の土は降り次ぐ雨を吸ひ

八角 三枝

葱の青さを際立たせあつ

台風の暴風圏に入りし夜半

皇帝ダリヤ揺れに揺れるむ

青木 秀子

台風になぎ倒されし唐黍の

出荷の作業遅遅と進まず

押尾 輝子

和太鼓を打つ音清しく響きあつ

西山満里子

溪流の冷たき水は胸に沁み

木曽路を独り歩み行くなり

娘らの月に一度の訪問日

今日は佐原の菖蒲園とふ

七夕の歌高らかに歌う児等

草原の道元気に駈ける

七十歳の若さで逝きし地井武男さん

多くの人に惜しまれながら

夕暮に雑草採る寸時つかれては

息つぎ休めり吾も老いたる

おむつにと母がくれたる藍浴衣

解くことおしみ形見となりぬ

老いし身に終焉迫る幾計を

呆気の防止に手習い続けり

穂を孕む青田のくらみにもぐりつつ

十指差し込み田草取り行く

菜園の赤く熟れたるミニトマト

口にふふみぬ露もろともに

夏になると、宮川にある乾草沼には様々なトンボが飛び交う。その中でも特に目を引くのは、羽が黒くひらひらと舞うように飛ぶチョウトンボである。チョウトンボはトンボ科トンボ目の昆虫で、北海道を除く全国に生息し、乾草沼のような水のある湿地を棲みかとしている。

トンボは、夏に産卵し、孵化した幼虫は一冬を越す。トンボの幼虫はヤゴと呼ばれ、水の中で小動物（ミジンコ・ボウフラ・小魚）などを捕って成長する。梅雨の頃に羽化して成虫となるため、一年を通して水がある所でない

と、生息できないのである。昔の水田や水路は、秋に稲を刈った後も水が溜まっていた

ので、トンボにとっていい生息場所であった。しかし、今日の水田は、冬には水を切ってしまうため、乾草沼のように一年を通して水を湛える

湿地は、トンボにとって貴重な生息場所となったので

## こうほう博物館 53

## 乾草沼のチョウトンボ

夏になると、宮川にある乾草沼には様々なトンボが飛び交う。その中でも特に目を引くのは、羽が黒くひらひらと舞うように飛ぶチョウトンボである。チョウトンボはトンボ科トンボ目の昆虫で、北海道を除く全国に生息し、乾草沼のような水のある湿地を棲みかとしている。

ある。

乾草沼は、もともと九十九里平野の後背湿地であったが、一時期養鰻場として利用されて以降は放棄され、その後、蓮が繁茂して今日のような姿になった。夏の乾草沼は蓮の花が咲き乱れ、そこに舞うトンボにとっては、まさにこの世の極楽と思っているのかもしれない。このような貴重な湿地を残していきたいものである。



▶ チョウトンボ